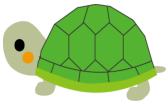
特別支援教育の扉 №８０　　令和５年１２月１８日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝



場面緘黙の子どもの思いを引き出す

話す能力があり、家では普通におしゃべりをするのに、学校等の社会的場面で不安や緊張のために話すことができない場面緘黙（選択性緘黙）の子どもの検査を実施しました。言葉を発することはありませんでしたが、予定通り検査を終えることができた秘密を紹介します。

１　不安を取り除き、リラックスできる環境を整える

・検査は、検査者と子どもが１対１で実施するが、子どもが安心して取り組めるように、答えやヒントを出さないことを条件に、学級担任に同席してもらった。
・検査中の刺激を少なくするため、なるべく他の子どもが通らない静かな場所を用意した。
・検査は60分～90分要するため、いつでも水分補給やトイレ休憩ができることを伝えた。

２　発話よりも非言語的コミュニケーションを大切にする

・言語表出の代替手段として、ホワイトボードへの筆記やイラストへの指差しを認めた。
・「分からない」の意思表示を、子どもの表情や態度から読み取っていたが、お気に入りの『カメのぬいぐるみ』にタッチすることに変えた。
・新しい検査に移るときや休憩を取りたいか尋ねるとき、子どもの頷きを大切にした。

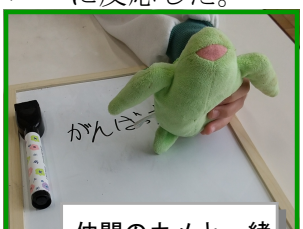
３　検査に見通しと達成感がもてる工夫をする

・最初に検査の終了時刻を伝え、分からないときは「分かりません」と教えてほしいことを確認した。
・「クイズチャンピオンに挑戦しよう！」という『頑張り表』を用意し、一つの検査が終わるごとに〇を付けてもらった。
・〇の数が増えたところで、「あと３問でクイズが終わるよ」と励ましたり、子どもに残りの問題の数を尋ねたりしてモチベーションを上げた。

４　子どもの反応の変化を見逃さない

・思いを表現するまで、右側や左側を見たり、ペンを触ったりして考えていたので、制限時間が決まっている検査以外は、子どもの表情を読み取って視線を外して待った。
・子どもがクスッと笑った瞬間、更に笑いのツボにはまるようにオーバーに反応した。

検査は休憩を入れながら、2時間以上に及びました。しかし、私は疲れよりも、言葉以外の手段で意思疎通ができたうれしさを感じました。子どもは学級担任を大きな安全基地として、仲間のカメと一緒に小さな冒険に成功しました。検査終了後、ホワイトボードに「がんばった」とうれしそうに書きました。カメのように、ゆっくり・じっくりと前に進んでください。



仲間のカメと一緒

とれたて直送便

～お母さんが食べないから・・・？～

文部科学省が2023年7月31日に発表した全国学力・学習状況調査によると、毎日朝食を食べているのは小学生で83.7%、中学生で78.6%という結果でした。また、毎日朝食をとる児童生徒ほど、学力調査の得点が高い傾向にあると言われています。最近ある小学校でお母さんが朝食を食べる習慣がないから子どもに食べさせていないという話を聞きました。朝起きて、食欲がないのは身体が正常に働いていない証拠です。朝食は、脳を働かせるエネルギーを作るとともに、体内時計を調整して一日を活動的に過ごすための大切なウォーミングアップの働きをしています。あなたは朝ご飯を食べてから出勤していますか？